

第5図 調査区東壁土層断面図 (S=1/120)

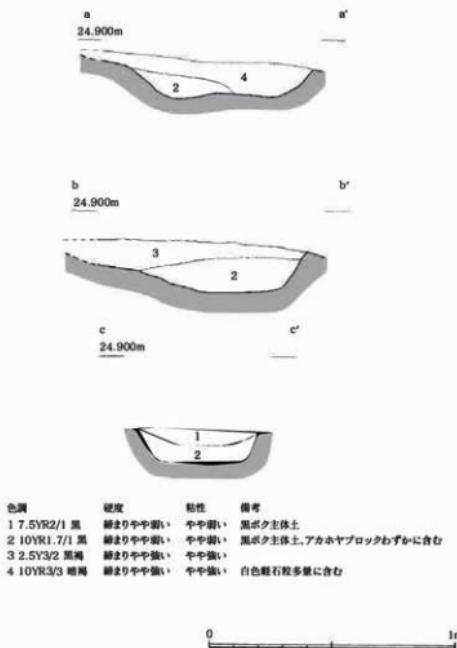
4 アカホヤ火山灰層上遺構

溝状遺構

調査区西側を南北方向に伸びる溝である。平均すると幅約 0.8m、深さは 0.2m 程度である。調査区の北側においては削平の影響で徐々に浅くなっている。埋土は上下 2 層が基本になっており、一部調査区中央附近において溝の上面が硬化している部分が確認されたが、直上層が近現代の造成土層であるため、その影響と考えられる。遺物は縄文土器片、近世磁器が出土した。

ピット群

ピットは数多く検出されたが、調査区内においては堀立柱建物を構成するような並びは確認できなかつた。埋土は何れも基本層序 2 層の黒色土と類似する土質であり、アカホヤ火山灰のブロックを含むものも確認された。遺物が出土するものは全体数からすると少数であり、尚且つ出土量自体も少量である。当該地の生活痕跡の希薄さを物語つている。



第6図 溝状遺構土層断面図 (S=1/20)

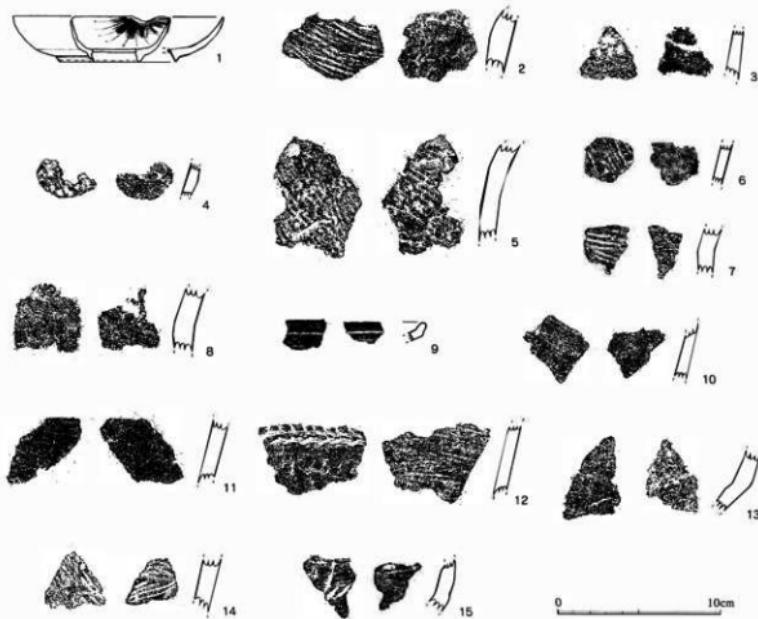
5 アカホヤ火山灰層下の調査

当調査区は、中央を旧道路によって大きく削平を受けていたため、その断面を観察することで、アカホヤ火山灰層以下のローム層が良好に堆積していることが容易に確認できた。そのためその攪乱を利用してサブトレンチを1ヶ所、他に3ヶ所のアカホヤ火山灰層下の調査を行うサブトレンチを設定した。その結果、ローム層の堆積は良好であるが、土器、石器はおろか焼礫も一点も出土せず、旧石器時代以降、縄文時代早期に至っても、当地は人々の生活の場としては利用されなかった可能性が高いことが明らかとなった。

6 出土遺物

遺物は前述のように、表土、包含層とピット、溝状遺構、風倒木による土層転位内から約100点が出土したに過ぎない。その中で図化に耐えうる15点を実測した。

1は溝状遺構から出土した近世磁器皿である。外面に圓線、内面に花文を施している。2から15は縄文土器片である。2は外面に貝殻条痕文を施している。後期中頃の所産とみられる。3は風化著しいが外面に貝殻腹縁刺突文を施している。4も風化著しいが、外面に棒状工具による刺突が見られる。5は風化しているが外面に貝殻条痕文が確認できる。6は外面を板ナデした土器片である。弥生時代後期頃の土器片の可能性もあるが、今回調査では他に1点の出



第7図 出土遺物実測図 (S=1/3)

掲載番号	出土位置	種類 器種	法量(cm)			胎土 色調	成形・調整等	備考	注記内容
			口 径	底 径	器 高				
1	1号構	縄文土器 深鉢	(12.8)	(7.1)	2.8	精良 灰白	一重圓拱・二重圓拱 口縁部付近に花文	臺付輪刺ぎ・内 外面に貫入有	平B SE1
2	ピット1	縄文土器 深鉢	—	—	—	外：橙 内：明赤橙	外：貝殻条痕 内：ナデ		平B Pi1
3	ピット3	縄文土器 深鉢	—	—	—	外：橙 内：明赤橙	外：貝殻条痕 内：ナデ	外面風化著しい	平B Pi3
4	ピット3	縄文土器 深鉢	—	—	—	外：橙 内：黒褐	外：刺突 内：ナデ		平B Pi3
5	ピット3	縄文土器 深鉢	—	—	—	外：橙 内：橙	外：貝殻条痕 内：橙ナデ	風化著しい	平B Pi3
6	ピット3	弥生土器 甕?	—	—	—	外：明赤褐 内：明赤褐	外：ハケ目 内：ナデ		平B Pi3
7	土層転移1	縄文土器 深鉢	—	—	—	外：明赤褐 内：明赤褐	外：貝殻条痕 内：ナデ		平B SK1
8	土層転移1	縄文土器 深鉢	—	—	—	外：黄灰 内：黄灰	外：ナデ 内：ナデ		平B SK1
9	土層転移1	縄文土器 浅鉢	—	—	—	外：黄灰 内：黄灰	外：ミガキ 内：ミガキ		平B SK1
10	土層転移2	縄文土器 浅鉢	—	—	—	外：黄灰 内：浅黄	外：ミガキ 内：ナデ		平B SK2
11	土層転移3	縄文土器 深鉢	—	—	—	外：にぶい赤橙 内：明赤褐	外：ナデ 内：ナデ		平B SK3
12	包含層	縄文土器 深鉢	—	—	—	外：にぶい赤橙 内：明赤褐	外：貝殻縫隙刺突 内：貝殻条痕		平B HG層
13	擾乱構	縄文土器 深鉢	—	—	—	外：灰褐 内：褐灰	外：ナデ 内：ナデ	外面に炭化物付着	平B カグラ ンミゾ
14	表土	縄文土器 深鉢	—	—	—	外：明赤褐 内：にぶい赤褐	外：貝殻条痕 内：貝殻条痕		平B 表土
15	表土	縄文土器 深鉢	—	—	—	外：橙 内：橙	外：ナデ 内：ナデ	外面に短沈線	平B 表土

第1表 出土遺物観察表

土はない。7も外面に貝殻条痕文が施されている。8は内外面共にナデ調整されている。他の土器と比較すると胎土に石英や長石、角閃石が多量に混ざり、粗雑な印象を受ける。後期前半の時期が与えられようか。9は黒色磨研土器の口縁部である。頸部まで残存していないため時期比定は困難であるが、口縁端部形状から入佐式でも後出段階と思われる。10は黒色磨研土器の体部片である。9と胎土、色調共に類似する。11は内外面共にナデ調整されている。外面はナデの単位がわかる程の強ヨコナデで調整されている。納屋向式の可能性がある。12は外面に貝殻条痕文、外面に貝殻刺突文が施文されている。丸尾式のBタイプと思われる。13は外面を丁寧にヨコナデ調整しているが内面は非常に雑なヨコナデとなっている。屈曲部に当たるが全体的な器形は不明である。胎土に石英、長石、角閃石が多量に混ざる。外面の一部に炭化物が付着している。14は内外面共に貝殻条痕文が施されている。15は内面がナデ調整、外面に短沈線が施されている。

以上出土した土器について概観してきたが、いずれも破片資料であり、1の近世磁器以外は器形が把握できるものもないため、時期比定には不安要素が拭いきれない。それを踏まえた上で資料をみると、概ね縄文時代後期前半から、縄文時代晚期中葉までの時期幅をもつ。これは過去の平畠遺跡の調査時において出土した土器の時期幅に収まっており、今回調査区より北側に広がる居住地からの転落等による移動によってもたらされたものと考えられる。

第Ⅲ章 総括

前章まで列挙した内容を纏め総括としたい。

第2図を基に周辺の状況に目を向けると、北側は宮崎県教育委員会による現況道路部分の調査で、東西約100mの間に9軒の縄文時代後期から晩期の竪穴建物が分布している。また東側50m付近では、宮崎大学による試掘調査で3軒の縄文時代後期の竪穴建物が確認されている。一段下がる南東側は、宮崎市によって山下第2遺跡が調査されており、調査区の中央から東寄りの位置で、やはりほぼ同時期の竪穴建物3軒が確認されている。これらの建物配置を見ると、今回調査区と調査区から南西側を迂回するように広がっている。深堀トレンチにおいて安定した堆積が確認されていることや、アカホヤ火山灰が比較的良好に残存していたことから、調査区部分が地形的に居住に適さないとは考え難いが、偶然に空白地帯となったか、他に土地利用をしていたなどの何らかの理由があつて空白地帯だったかが問題となるが、今回の調査でその答えとなるような遺構、遺物は検出されなかつた。

遺物は前述のように少量の出土に留まっており、近接する居住区域で使用されていたものが散布したと考えられる。

以上のように、今回調査区では遺構、遺物共に希薄であったが、近接する位置で多くの竪穴建物などの遺構が確認されており、また遺構面であるアカホヤ火山灰層まで浅い所で20cm足らずと現地表から非常に低深度で遺構が検出される可能性があることから、今後周辺の埋蔵文化財の取り扱いには十分な注意が必要である。

今回の調査は3月に行われたが、季節外れの寒波の影響で、宮崎市内としては珍しい降雪日を記録するなど、厳しい状況の中での調査となつた。このような中参加してくださった発掘調査作業員の方々、様々な協力を頂いた国立大学法人宮崎大学、発掘調査中ご教示、ご指導を賜った宮崎大学教授柳沢一男先生など、平畠遺跡の発掘調査関係したすべての方々に、心より感謝申し上げます。

参考文献

- 金丸武司 2006 『本野原遺跡三』、田野町教育委員会、宮崎市教育委員会。
菅付和樹他 1985 『宮崎大学埋蔵文化財調査報告Ⅰ』宮大農学部平畠遺跡XXV区、宮崎大学、宮崎県教育委員会。
中山 豪 1997 『車坂、山下遺跡群』、宮崎市教育委員会。
北都泰道編 1985 『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第2集』、宮崎県教育委員会。
柳沢一男 1992 『平畠遺跡試掘調査報告』宮崎大学駐車場予定地の試掘調査、宮崎大学教育学部。